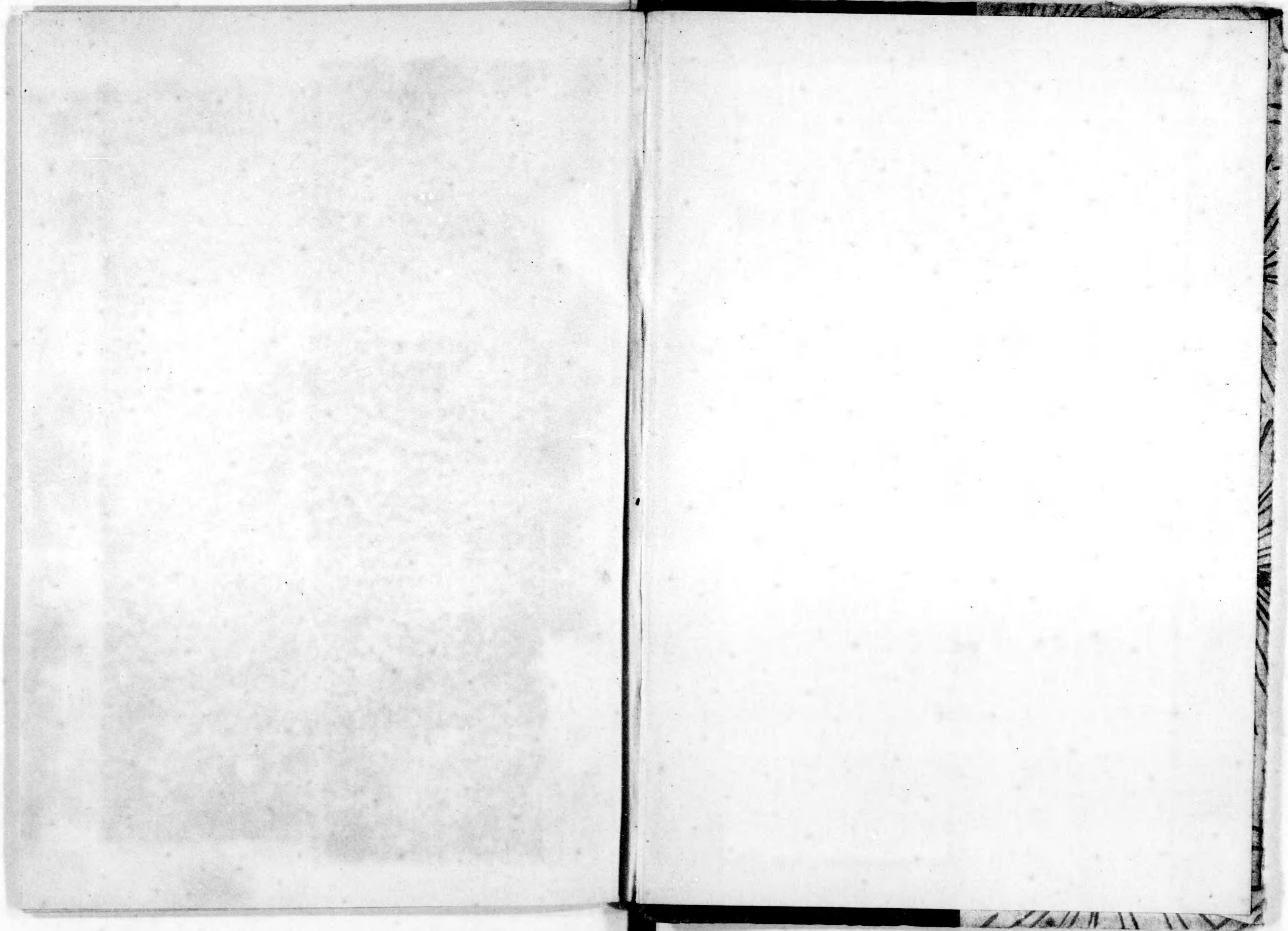
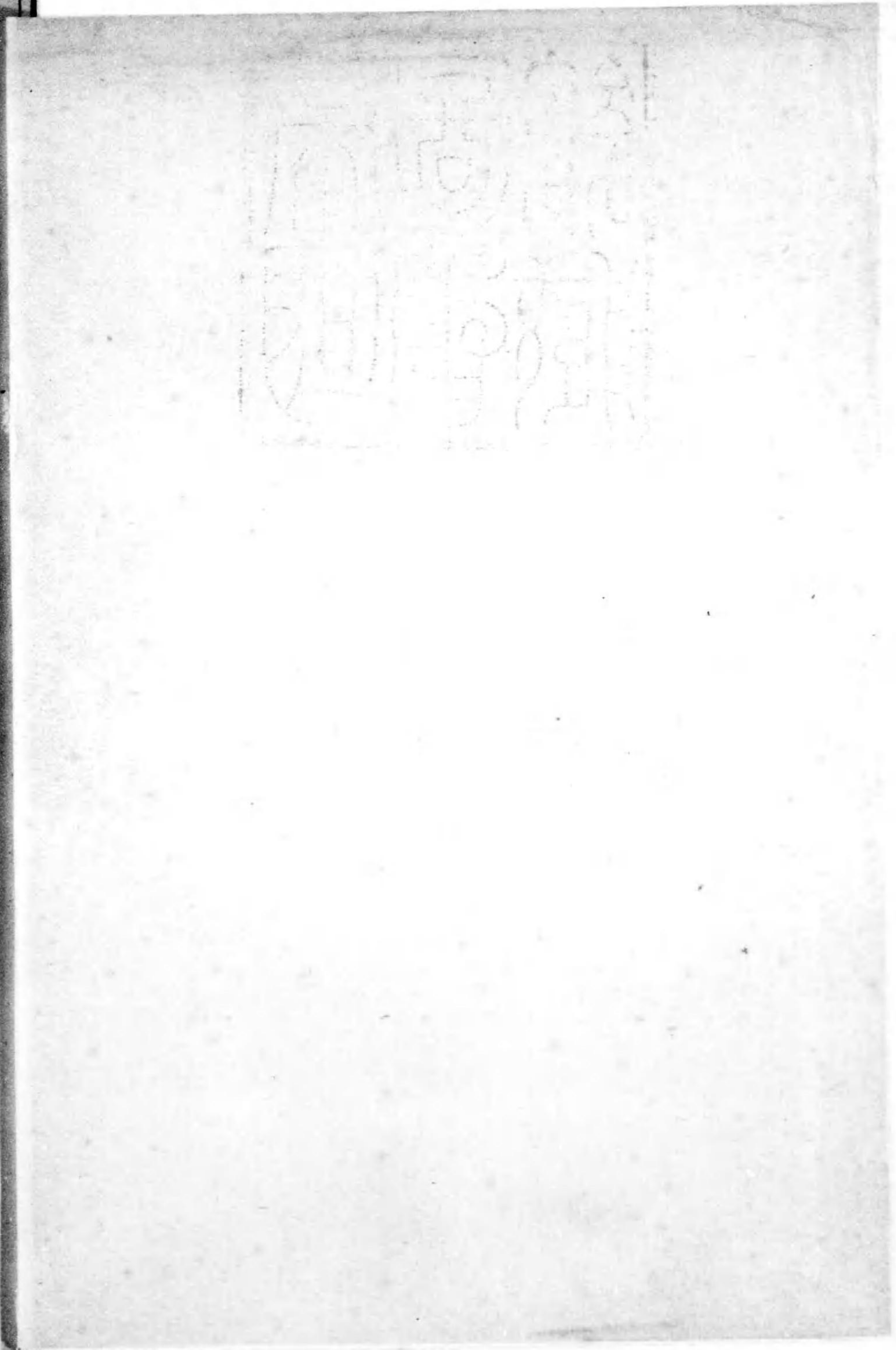


始







特 101
199

序

一

* 本集は、大正四年の四月に出版した「白砂集」以後満
 二ヶ年間に於ける收穫をあつめたもので、數の上から云
 ふと、極く僅かであるけれども、私としては、どれもこ
 れも、自分の血や肉のやうに、いとしくなつかしいもの
 ばかりである。
 勿論、この二個年間の作物中には、全く私一個の手記
 に過ぎないやうな、百幾つかの歌はあつたが、それらは
 總て本集に採録することをやめてしまった。

*

私は、どうしても歌を作ることをやめられない、それは
 百行二百行の日記を記すよりも、この三十一文字の方が、
 最もよく私の心持を表はすのに適して居るから。
 わたくしは、今、一つ一つと古い歌をよみ返して見て、
 全くその時の氣分になり得る。

*

私のこの二ヶ年間は、大方いそがしい雑誌記者生活に
 あけ暮れした——今でもさうだが——食ふといふため
 に、眞剣に働いたこの時代は、私をして、眞に生くべき
 いろ／＼なことを教へた。

それだけに、その時の收穫は私として、恐らく今後選
遊することの出来ない、尊い意味のあるものでなければ
ならぬと思ふ。

本當のおどろき、

本當のかなしみ、

本當のよろこび、

それらの總ては、みなこの二年間によつて、初めて味
ひ得たと云つてよい。

*

本集の稿を整理するに當り、私は、はじめて私の歌に

就て大きな發見をした。

それは、私には夏季の歌が殆ど無い——あつても極め
て拙い——といふことである。これはどう云ふことに起
因するものか、わたくしにもよくわからない。

*

さばれ、過去は過去として、私はまた更に新しく生き
なければならぬ。

この小さな足跡をのこして、うら若い旅人は、また何
地ともなく旅をつゞける。

■生、黒川白山の寓居にて

穂 草 生

本文中の各項扉カッツは、折りにふれ、著者が歌のノートの片端に、戯畫せるもの、もとより、繪となれるや否やは別、歌と共に、當時の氣分を偲ぶよすがなり。

松かさ序歌

松かさ、松かさ、わが生れし國の
渚にて、潮風あびつ、松が枝に、
つやつやとしも青つ松かさ。

明け方のなぎさの林まつかさの羽根あ
る實をばなつかしむかな

風わたり羽根のある實が舞ひまへばな
にかさびしき松かさぞもよ

海を見てこゝろうつろな人のまへ青ま
つかさを投げてやりける

網を干す砂場のなかの一つ松砂をあび
あびまつかさもちたれ

磯松のかたきまつかさとりむとし枝高
ければかなしみあまる

*

つばくらめ	内容
總てを捨てし	
春背册子	
天才より凡庸に	
新涼集	
深夜落葉	
さびしい時計	
故郷にて	
父の血	
楓わか葉	

157
S. H. V. S. S.

つばくらめとりとめもなき悲しみの前
に來て去る水無月の頃

つばくらめ汝がうばたまの羽の色とわ
が事務服は黒く悲しき

水無月の濃みどり空ゆ流れ來し窓の外
なる若きつばくら

歡喜の涙押へあへずも空あふぐ水無月
よわれに幸あれや

初夏の海の青さのありくと目にこそ
見ゆれ草に寝ぬれば

郊外に出てみどり萌えづる草に寝むあ
あ水無月の青空のもと

やうく親孝行をする心われに起り
て水無月に入る

孝行の心この子にちこり來ぬうれしさ
ことか悲しきことか

大正四年晩春、駿州靜浦のあたりに旅せる五首

海が見ゆ汽車に夕べの海が見ゆ手あげ
て沖の帆を呼ばむかな

倉皇と来て倉皇とかへるべきこの旅び
とに雨ふれる町

夕やみに祭禮の灯がともる町あわたし
しくもわが汽車は去る

さくら花はな散りはてし駿州の町は祭
のどよめきに明く

夜をこめて京に歸らむ小雨ふる中に汽
車待つあわたしさや

夜の町女のやはきころも手にわびしや
秋の風ひるがへる

小春月肌にしたしむ天鷲絨の夜着の襟
こそあかず懐かし

心なく伸びたる髪の亂れつゝ秋に入る
日を嘆きぬるかな

今宵また頭しみにらに痛みけりひくき枕
を押しやりて寝る

煙草やめて少し頭をなほさんと殊勝に
思ふさびしき朝よ

襟垢が冷たく肌に觸るゝさへひとり
秋はいかに淋しき

あき椅子を三つ程ならべよこたはり遠
き街の音を聞く夕

ふとしたる心に晝の電燈の柱をひねれ
ばさびしさの湧く

晝ともる白き電氣の光りこそ戀ざめ人
に似てはかなかり

小さなる怒りを抱き夜の町の秋風の中
に立ち迷ひけり



總てを捨て、

秋あきに入る、戀こひ人もなき若わかものにわけても
風かぜのいたき宵よひかな

小夜こよひ衣え片かたしき寝ねるによしもなき此こゝ身みに
しみて蟋蟀こけり鳴なくも

照りつづくおそ夏の日のくるわ町朝の
雨待つ人多きかな

我とわが作り笑ひの淋しさを思ひなが
らに夜を獨り寝る

總てわが足らざる爲めの嘆かひに涙を
誘ふ夜の幾夜なる

ペンとれば心自づと神のごと仕事の前
にひれ伏してゆく

筆置きて午後五時過の椅子により足を
伸せば飢じさを知る

今日のものが勤めの可愛ゆさに總てを
捨て、机によるも

總てを捨て、今日の仕事に携はる秋よ
此身に禍ひあるな

パンの前に總てのわれを投げ出すその
醜さの涙ぐましさ

夕暮の廻轉椅子に身を投げて憂しやこ
の身に秋の風見る

風悲し立樹は立ちしまゝにして秋に入
る日の大空をさす

秋の夜や酒のくづれの一群ゆのがれて
月に煙草吸ふかな

ころくくと茶のみ茶碗を廻しけり何か
心に物足らぬ日は

夜具の襟師走の朝のひえくくと男ひと
りを包みたりけり

椅子の上坐りぬあぐらかきて見ぬ心に
何かわだかまりあり

愛あいされていやさら罪つみぞ深ふかみゆく溺なれ得え
ぬわが心こころの上うへに

おぼれむと思おもへど心こころ溺なれ得えぬわれに無な
用のあだなさけすな

ちらら、ちらら淡あ雪ゆきかもよ溺なれ得えぬ心こころと
りままく仇あだしなさけは

何なにとかやよき名なの酒さけを今いま宵よまたのみ
と人ひとのすゝむる夕ゆふべ

きぬくのさても冷たき酒の味忘れか
ぬけり氷雨のふれば

おとなしく寝ねむと思ふ夜をひと夜風
は街にふきてやまらずも

夜の空のもとにわれありわれ酔うてふ
ところ手すに星ふりかゝる

酔ひしれてわれが躍ればあやつりと笑
ふ女に夜の酒みどり

冬のめざめ切れて枕にまつはれる髪を
いそしみもてあそぶかな

朝あけや枕の紙にやゝ長さ髪一筋がさ
れてまつはる

酒の座をのがれて今宵かへり來し若さ
男に星ふる夜かな

彼あはれ彼可愛ゆなど思ふ夜の我身は
犬に似て淺間しき

日々の社用の手紙うづ高さ中かきわけ
てわが名さがすも（以下編輯室にて）

我編みし雑誌が今日も賣るとやペン
あきてその噂聞くな

營業のそろばんの音さびくと午後の
ゆるみし心揺がす

日々に赤き筆もてページ追ふ進行表に
さざむいのちよ



春宵册子

新あたしくまた他人たの家に巢すをくひし男おとこあ
り冬ふゆのたけて行くかな

この日向ひなたに夜具よぐほしなばと殊勝しゆしょうなる心こころ
起おこしぬそれもさびしき

家もたばあれも買ひたしこれもなど心
ほりすゝはかなからずや

新しき住居に今宵買うて來し茶器めづ
らしく眺め入らるゝ

長煙管の首にひつかけ引よせし炭斗の
音、夜は更けにける

くゞまりて今宵寝ぬるにありがたし蒲
團日向にふくらみてあり

こゝろよく日向ひなたに蒲團ふとんふくらめり今宵こんや
はひとりくゞまりて寝ねむ

更ふけぬれば歸かりともなきわが宿やどの古ふるき
雨戸あまどを思おもふなりけり

春はる一夜ひとよ、醉まひたき酒さけにしみぐと醉まうて
ある身みの幸さいはひなるかな

春はるあさくやくぬくもりし土つちの上うへ靴くつが浴あ
びたる塵ちりのかなしさ

今日よりはこの生活のつゞくらむ、日向
に蒲團かつぎ出しぬ

その中にぼつねんとして煙草すふ春ふ
かき日の夕暮の部屋

煙草さへ粉となりけりつまみ出すその
指先にまつはる孤獨

夜となりぬ光の強き電球を求むるも心
さびしければか



天才より凡庸に

天才が凡庸の子にうつりゆく悲しさよ
酒のさめぎはのごと

あはれはれ 天才の子のなれのはて春の
日向に欠伸してあり

さめよさめよ天才の名に欺かれいつま
てかきみ酔うてあるべき

みづからを天才としてゆるしたる淺間
しかりし日のなつかしも

天才も並の男も一樣に日向に出て、春
をめでけり

いかなれば短き命もちて來し天才の名
は呪ふべきかな(以下三首人の死に)

早春の雨はしみらに地をしめす天才の子が土を被ぐ日

天才が才を抱きて死にゆく日小雨は春の雪となりけり

渚の國より老父上京す七首

よろこびそ下宿住居に招じたる子はく
るしきをさなよろこびそ

早春の雨はしみらに地をしめす天才の子が土を被ぐ日

天才が才を抱きて死にゆく日小雨は春の雪となりけり

渚の國より老父上京す七首

よろこびそ下宿住居に招じたる子はく
るしきをさなよろこびそ

父ちちにすゝむる老おきない止どめ薬ぐすりほしきものひ
さびさにして相あひまも見みる父ちち

末すえの子こはまだ斯かくてあり末すえの子こに涙なみだな
がしそ老おきないたる父ちち君きみ

久ひさ々に相あひま見る父ちちを同おなじくはうれしきこ
とを聞きかすべきもの

目めざむればまだ寝ねもやらぬ父ちち上うへの煙たば草こ
すふあり物ものうれひつゝ

巢すの中なかの鳩はとの子このごと夜よもすがら父ちちに
抱だかれて寝いぬるばうれし

久ひさにして會あへばひたすらわが父ちちの老おい
のみ見みえて語かたることなみ

雨あめふれば靴くつのそこよりしみ來きるかの泥どろ
水みづに心こころいたみぬ

もぎ取とりし共襟ともえりのあとありくと見みゆ
る衣ころもに雨あめふりかゝる

ひとりなり共襟はぎし袷着て街に出づ
れば涙ながるゝ

垢づけは共襟はぎて着つゝくるこのひ
とり身の悲しきころも

スミス都の空を飛ぶ三首

あまかける鳥かスミスのはなれ業みど
り射返す夏の日のもと

あざやかな一廻轉くわいてんをなせし時とき汝みが胸むねぬ
ちはいかに躍をどるらむ

あなみごと多くおほの人のたましひを集あつめ
て汝みは宙ちゆう返かへりする

夏一日、刺紅と相州森ヶ崎に遊び
海を見て心しきりに躍る。六首

わが俣海くまうみにむかひて走はしるなり藻いの香かは
せずや目めを閉とぢて居ゐむ

ふるさとの渚なづみに今宵こよひ歸かへりしやわが寢ねし
あたり海うみしきり鳴なる

よしきりの夜よすがら鳴なける森もりヶ崎さきかの
料亭りやうていの主婦しゆふが弾ひく三味み

かゝる夜よに男をとこばかりが來くることのひた
なげかるれよしきり鳴なけば

旅たびの宿しゆくゆかたの丈たけのやゝ長ながき悲かなしみを
そとうつす姿見すがたみ



新涼集

夜をこめてよしきりが鳴く森ヶ崎男二
人が背合せに寝る

秋^{あき}がくる蚊^か帳^{ちやう}のつりてのひらくと動^{うご}
けばわれとわが身^みさびしも

押^おへたる指^{ゆび}の下^{した}をばそと脱^ぬけてまた横^{よこ}
に匍^もふつまぐる小^こ蟲^{むし}

愛らしくまた憎くらしき横ばひの小蟲
を一夜もて遊びけり

新涼や風にあやしき目ざめのみつゞく
幾夜となりにけるかな

寢がへりの頭おもたき夜を幾夜白き敷
布に秋を覺ゆる

風の日のちまたに出でぬ　　が袖のはた
くするは貧しかりけり

秋さびし寝ざめにふるゝ指先に白き敷
布のやゝ冷えてある

ぴんとしめし障子の中に夜が來ればし
みく秋はなつかしきかな

秋風の夕べを下る神樂坂いそぐ用なき
われと小犬と

急ぐにはあらねどなぜかとび降りがし
て見たし秋のあしたの電車

満員の電車ゆびげに吐き出され秋を身
にしる夜の交叉點

秋さびし荷物のごとく扱はれ夜の電車
ゆ吐きだされたり

乗りすてし電車まことにやすくとこ
ゝを去りたり物足らなくも

夜の電車すげなく客を押しつめし彼の
無口なる車掌を憎む

終電しゆうでんに近ちかく降ふり立たつ交あ又また點てん秋あきの夜よさび
に線路せんろ光あれり

つゝましく出で先まに火ひをばうづめ置おき街まち
に出いてゝもその火ひを思おもふ

埋うみ火ひをか立たてゝまづ煙草たばこ喫くうつと
め歸かりの夜よをふれる雨あめ

うづみ火ひをこゝろさびしく搔かい立たてゝ
寝ねる氣きになれずうつ伏ふして居ゐぬ

夜^よを寒^{さむ}みともり残^{のこ}りの埋^うみ火^ひをかいは
こしつゝひとりを嘆^{なげ}く

搔^かい起^{おこ}しかい起^{おこ}しこの埋^うみ火^ひを大^{だい}事^じが
りけりひとりなる秋^{あき}



大正六年春日
永三郎作

灰の中ほひなかに一つ見出しみだしし火ひの種たねを大事だいじがり
つゝ煙管きんぱんもて來ぬ

女をんなと共ともに出いて、歸かへらぬ男をとこありみやこの
秋あきに堪たへぬなるべし

秋さむし握りしめたるペン軸のぬくも
りもげになつかしきかな

今日はやゝ謀叛氣おこし縁近く机を出
せど相もかはらず

おとなしく仕事せむとて朝日さす窓に
机の向かへにけり

窓際に朝の机の塵ふけばをかしやペン
をとる氣になりぬ



深夜落葉

夜をふかみ落葉ことにはげしかり隣室
の客いま歸り來し

落葉か雨か暮秋の夜をふかみ寢られて
あればさびしき音す

とある場末の印刷工場にて讀める
八首

冷^ひえにたる番茶^{ばんちや}すゝつて待^まつ程^{ほど}に赤^{あか}字^じ
きれいになつて來^きにけり

再^ま校^{がう}を待^まつ間^{かん}に壁^{かべ}のはり紙^{がみ}を讀^よんで見^み
たりき秋^{あき}の工場^{こうちやう}

残^{のこ}りたる職^{しやく}工^{こう}が字^じを捨^すふ聲^{こゑ}夜^よふけとな
ればさびしき工場^{こうちやう}

泣ながら朱筆握つて居たりけり校正室
の夜ふかき部屋

カン／＼と物のひびきの牙え返る工場
に來り朱筆とり居ぬ

いつまでかこんな稼業をつゞくべき朱
筆を投げてそと風をさく

初校でも再校でもまだ氣にくはぬこの
ふとりたる一つの文字

節つけて校正刷を讀んで見るかなしき
秋の印刷工場

雪となる空のくもりよ足の指地を踏む
たびにいたくつめたき

人にかくれてかくる電話の切るゝ時さ
びしや雪のふりてやまずも

握りしめやゝぬくもりし白銅貨電話機
の上におきてなげきぬ

失職ししきのむしろ悲かなしさうらやすさ朝あさの時とき
計けいに目めをかさずけり

興きよう奮ふんの後のちにしづかに願かこみるわが身みのま
はりさびしかりけり

とめて來こよ小こぐらき部へ屋やにくらい顔かほも
の欲ほしさうに待まつはこの身みぞ

床とこをのべそれをわき目めに仕し事ごとするやう
やくあんか温ぬみしやらむ

もつて來る宿の夕食の待ち遠く部屋ぬ
ち四五度まはりけるかな

人間も飢うれば犬の如きかも夕食くる
間を部屋ぬち廻る

何時として清き朝日を見も得ざるこの
朝寝をば悲しみやまず

明日こそは赤い朝日に顔見せむそれを
樂しみひとり寝にけり

時計のつくりかた

夕べさびし大きな風にくるまつて流る
るごとく宿にかへりぬ

しかすがに肌のぬくみて温まるわが夜
の衣夜を待つらむか

買^かうて來^きし小^{ちひ}さき時^と計^{けい}わが部^へ屋^やに最^{さい}初^{しよ}
の時^{とき}をしめしたるかな

針^{はり}だけは幾^{いく}度^どぐるくまはつても時^{とき}を
打^うたねばさびしい時^と計^{けい}

町^{まち}に買^かひ抱^だいて歸^かりしこの時^と計^{けい}とぼけ
た時^{とき}を指^さして動^{うご}ける

この時^と計^{けい}今^{いま}日^ひからわしが夜^よふかしの目^め
じるしとなりチクタク動^{うご}く

時計屋でたらめの時計指して居し時計
の主となりてねぢ巻く

大げさなはかりごとなどする暇にまづ
妻めとる考へをせむ

妻めとるその前一夜放埒の終りの酒を
飲まむといふ友

新妻の半襟をそがネクタイに用ひし友
と秋の夜を行く

ここの夢さめたる後のさびしさか新妻
ひとり大事がる友

下宿より小さき家にうつるてふその荷
の後につきてゆきけり

新妻と添寝過ぐるを氣づかふや友が買
ひゆく目ざまし時計

帯とけば財布皮肉に落ちにけりまづし
き音が部屋ぬちに満つ

雪まじり雨は降りけりつとめの身悲し
みながら電車を降るゝ

給料の袋をぼんと懐に入れてしばしの
氣をやすめけり

ま白なる路にあしだの音を運ぶこのた
よりなき夜更けのちまた



故郷にて

0-8
1-11

久にして歸りし總の國なる渚の町は、
われを数々の思ひ出に泣かしめたり

妻^{つま}あらばつれてゆくべき故郷^{ふるさと}の渚^{なぎさ}にひ
とりふつと歸^{かへ}りぬ

久々に歸るふるさとあまりにもわが身のまはりさびしかりけり

知り合ひがあつてほしさに停車場を見渡しにけり郷に歸る日

わが汽車は吾國なまりの一群を乗せて故郷に近づきにけり

汽車の中米相場など語り合ふ二重廻しの光りたる目よ

雨あまばれの夕ゆふ陽ひほんとにままんまるるく隅すま田だ
にううつつる、時ときに汽き車しや出いづ

この列れ車しやはじめてわれが乗のりししやに冷ひ
え冷ひえてあり悲かなししききはみ

夕ゆふ陽ひと赤あかい切きり符ふとをかかししやな月づき給たま取とが
乗のり捨すてし汽き車しや

青あお線せんののはいつつた客きやく車しやながし目めに見みつつ
コこツツコこツツ踏ふむ石いしだゝみ

國技館のま上に夕陽いや赤しこの時や
つと我汽車は出づ

文筆の細きをたよる身を以て彼の漁人と語る皮肉さ

儲ければそれを一夜の酒にする彼の漁人と語りあかしぬ

久にして相會ふものをおどろかてわれを見送る淋しい女

相會へど語る時さへ許されぬ女どうし、
たら心なごむや

薄命のあのをみな子を救はむか汽車に
乗るまでそれを思ひぬ

薄命が汝を無口にしたのやら返事の外
にもの云はぬ女

今少しはれしくは笑はずや若さは
二度と歸るまじいぞ

汝もさびしいわれもさびしいこの男女、
女夫とならばいかくなるらむ

今日別るればそれが最後の別れてふ祖
母の言葉をきゝつ靴はく

兄上がさしかけくる、傘の下雨の別れ
の汽車に乗りけり

兄上、兄上、汽車の窓から首を出し煙草頰
てばうれしがる兄

兄の前この弟が全くの企てを投げ出せぬかなしさ

雨なれば渚の驛はいやさびし別れに兄と煙草を分つ

何時の間に寝入りたりけむ波の音氣にしてありし父のかたはら

どんどんどんと利根は流れてをやみなしこの川口に來りてなげく

なげけとてとまる筈なきこの川のされ
ど悲しき流れなるかな

驛員がたつた一人て汽車を待つ客はわ
れのみ渚の小驛

雨なればあわてゝ汽車に乗りにけり傘
をつぼめて兄は見送る

兄上が傘の中よりすつと脱け乗ればさ
びしい終列車かな



父
の
血

三味きけば三味を習つて見たくなる浮
氣ごゝろを抱いて寝にけり

いそがしい仕事のものなかつた
とがかすみのごとく浮び來

これやこの廢家に近き家のすみ、二階八
疊に春をわび住む

たゞ廣い二階の隅の八疊に強き電球つ
けてすみけり

水道橋、乗りかへの間の辻風に満員の電
車を追つて見たりき

しみぐと皮膚にしたしむぬくもりも
新しければうれしや肌着

部^へ屋^やの隅^{すみ}にぬいて捨てたる新^{あたら}しき肌^{はだ}着^ぎ
に肌^{はだ}のぬくもりうれし

湯^ゆに入^いればわが手^ての爪^{つめ}の艶^{つや}のよさをそれ
に何^{なに}だか力^{ちから}を得^えたり

寝^ねがへりをうてばいよいよ目^めは冴^さえつ
もの思^{おも}ふ夜^よのつくもものかな

わがペン^{ペン}の金^{きん}の金具^{かんぐ}がよく光^{ひか}るそんな
刺^し戟^{げき}にまた仕^し事^{ごと}する

皺しわにせぬ切符きっぷ車掌しやしやうにわたしたりそれが
何なんだかうれしくてならず

朝あさ早はやみ誰たれより先にさきに鉄てつ入いれし切符きっぷの穴あなを
のぞき見みにけり

夜よをふかみ電車でんしゃは車庫しやこにねじりたれ大おほ
手てを振ふつて線路せんろよこぎる

珍めづしく今日けふはあたまが輕かろ々々しそらなく
さめのはかりごとする

出^で來^きぬことわれとわが身^みに相^あ談^{だん}をもち
かけてみぬなぐさみのため

ともすれば父^{ちち}より受^うけし血^ちが躍^{おど}る母^{はは}よ
りうけし血^ちが泣^ないて居^ゐる

いろ／＼な計^{けい}畫^わなどをして見^みてはそれ
を悔^くい悔^くい老^おいこみし父^{ちち}

すべての苦^くすべての樂^{らく}をあの皺^{しわ}にたゝ
みて老^おいしわが父^{ちち}なるか

朝の電車はさむ切符のはさみ屑舞ひ舞
ひ膝に落ちてけるかも

帝劇のバルコニーから見たる街人等は
謎のやうに走れる

雀一羽庭のかへてへ飛んで来て黙つて
とまり空あふぎけり

首くびをふり羽はね根ねふりぶつとふくれたる雀すずめ
だまつて下したにありけり

春はるの日のかなしみに似にて羽はねをふれり小
雀すずめすゞめこゝに飛とび來こよ

わが宿の近くに、よく夜泣きする
兒あり、深夜目ざめては母を困ら
するさま、ありありと思はる。

夜よなきする小兒こども近きん所じよにあるなりき春はるの
目めざめをことによく泣なく

夜半の目ざめ夜泣きする兒はまたして
も母こまらせて泣けるがごとし

或夜ふと夜なきする兒に目ざまされ風
の音など聞いて居たりき

夜泣きする兒今夜もわしが寝ざめごろ
となりの家に泣き出すらむか



楓
わ
か
葉



わが常に仕事する室の硝子窓ごしに、
一本の楓あり、春となりて、いとふく
よかに芽を出しぬ。はじめはうす紅に
中頃や、黄をまじへてふくらみ、遂に
緑となる。
うれしくも、やさしきは、わが楓の
わか葉なるかな。

かへてあり窓まどにのぞめる一枝えだがことに
はやばや葉はをつけてけり

いそがしき仕事しごとのあひ間まぬすみ見る楓かへ
わか葉はに春はるの光ひかりれる

うすべにの楓かへ若葉わかばはうれしやな風かぜにふ
れふれみどりとなるも

花はなのやうなうすべに色いろの楓かへの芽めそれが
葉はとなり春はる静しずかなる

白しろい鳥とり、何なんといふ名なの鳥とりやらむほこり
を浴あびて外そとぼりを飛とぶ

*

日ひねもすをほこりあびあび飛とんで居ゐる
外そと濠かいの上うへの鳥とりはさびしい

東とう京きやうのもなかにあんな白しろい鳥とり、それば
かりさへさびしかりけり

砂ほこり白紙の上^へにうつすりとかくれ
ばペンはさびしくきしる

きしきしとペンがきしればこの仕事^{しごと}
ましてしまふ氣にもなれなく

ちつとして居ればからだ^が痛み出すこ
の繁忙^{はんばう}になれていく日^ひ

電車^{でんしゃ}いま四谷^{よつや}見付^{みづけ}の隧道^{とんねい}に入るとまひ
るの灯^{あかり}をつげにけれ

電車より降り降るれば午後の砂ほこり顔を
あほふにやゝめくるめく

草色のチヨツキの鉦よるこびつ二階降
りあり撫て居たりけり

打電して局を出づればわが心いたくお
ちつき青空あふぐ

上草履いま来た客がはき去りぬ素足つ
めたき宿の階段

湯より出て氣遠になりしころもち強き煙草は手にけぶりつゝ

對談の間チク／＼なつてありさびしきは友の腕時計かな

ころころと火ばしの先でころがせば僅かに光る火種いとしも

カチといひて扉は自然にひらきたり心静かな午後の事務室

こゝに一匹の犬あり、夜となく晝となく、見なれぬ人の目にふるれば、必ず吠ゆ。
されど、噛みつくほどの勇氣もなく、たゞ、逃げ逃げ吠ゆるなり、飼主の説明によれば、その小犬なる時、多くの若者より、様々にさいなまれたる爲めならむと、
彼は、これら、冷酷なる人のために、果敢なき復讐のこゝろもて、離れかれと無く吠ゆるならむ。
その心を思へば、悲し、痛まし。すなはち彼のために歌へる九首。

をさなき日ひさいなまれたるしかへしに
人影ひとかげみれば吠はえるといふ犬いぬ

ひるとなく夜よとなく人ひとを吠はえてありし
づ心こころなき汝なんのいとしも

家ぬちにかくれて今宵ねむれるやなき
聲せねばものたらぬかな

汝がまはり皆うたがひにありぬべし人
さへ見れば吠えてある犬

あやまつて家人を吠えしそのあとの汝
が妻のいとしもいとし

さな吠えそわれに便りを持ちて來し配
達夫ぞと云へど聞き得ず

されど、われにはよく馴れて

吠えらるゝ覺悟て來れば吠えもせず馴
れでもさびしわが宿の犬

よく見れば吠える覺悟て吠えもせずい
としき犬の尾をふる月夜

吠えたり身がまへまでもしたりしが
我れ見て吠えずいとしき犬よ

試作四首

かうやつていつまでゐたらどうなるか、
目とぢて路のまん中に立つ

目は閉ぢてあつても眞のめくらにはあ
らず、人等は素通りにせむ

夜なら夜、ひるならひるがつといたら
よからうがなと不圖思ひみる

歌ふのではない、かうしてひとり泣いて
るるさびしい春の夜の卓により

松かさ——了

大正六年四月十二日印刷
大正六年四月廿八日發行

定價金七拾錢

不許複製

東京市牛込區神樂町三ノ二

著者兼發行者 尾張眞之介

東京市牛込區四軒町五二

印刷人 福山福太郎

東京市牛込區神樂町三ノ二

發行所 莫哀社

振替東京三〇三三〇
電話番町六八七

装幀 暮路よのみ

包装 三上知治

肖像 小林永二郎

木彫 小駒寛

278
969

終

